

信州大学共通教育科目「学術リテラシー」 アンケートの分析と今後の展望

平井 佑樹 小山 茂喜 長谷部 めぐみ 前田 宏太郎

キーワード：初年次教育 共通教育 授業アンケート

信州大学では、2020年度以降に入学した学部生を対象に全学必修の共通教育科目「学術リテラシー」を開講している。学術リテラシーは、高校時代に学んだことを大学生としての視点から改めて学習し、学習者が自己を開拓するための科目として設定されている。本稿では、2022年度までに実施した「学術リテラシーアンケート」の分析結果を報告し、本授業実施後の成果を確認した上で、今後の展望について述べる。

1. はじめに

信州大学（以下、本学）のカリキュラムは、共通教育と専門教育の2本の柱からなっており、本学のどの学部のカリキュラムも、この2つの柱によって構築されている。共通教育は、さらに次の3つの枠組みで編成されている。

- ・ 基盤系：学問形成に不可欠な基礎・基本的な知識の習得・能力開発
- ・ 教養系：社会人として必要な幅広い教養の修得、問題解決力・探求力の開発
- ・ 専門基礎系：学部専門につなげるための知識や能力の修得

本稿で取り上げる「学術リテラシー」は基盤系に属する共通教育科目であり、全学部生が必ず履修しなければならない必修科目として開講されている。学部・学科等によって、本科目の単位を修得できなかった場合の対応が示されている[1][2]ものの、2020年度以降に入学した学部生は、1年次の前期に本科目を履修し単位を修得する。

学術リテラシーの達成目標は、次の3点である[3]。

- ・ 大学での学びを充実させるための読解力や記述力を身につけ、学術的な探究ができるようになる。
- ・ 協働で学ぶことを通して、他者とのコミュニケーションがとれるようになる。
- ・ 新聞や本などを読むことを通して教養を深め、ICT（情報通信技術）を活用して適切に情報を収集し、整理分析・表現する情報活用能力を身につける。

高等学校までの学びをベースに、思考・判断・表現に関わる基礎的・基本的なトレーニングを協働で行い、それを通して、大学での学びで必要とされる読解力や記述力、他者とのコミュニケーションの取り方や、ICTを活用した情報処理力などを身につけ

ることが学術リテラシーのねらいである。具体的な学習内容は2.1節で説明する。

本学では、次の3つを目的とした「学術リテラシーアンケート（以下、アンケート）」を、各年度の履修者を対象として学術リテラシー終了直後に実施している。

- ・ 各履修者が本学へ入学する前の状況を確認する。
- ・ 学術リテラシー実施方法や提出課題の内容に関する意見を聴取する。
- ・ 各履修者が学術リテラシーを履修した後の成果を確認する。

本稿では、2022年度までに実施された3年度分のアンケート結果を示し、これら3点について分析・考察するとともに、今後の実施方法などの展望について述べる。

2. 学術リテラシーおよびアンケートの実施概要

2. 1 学術リテラシーでの学習内容

学術リテラシーでは教科書が指定（2020年度は[4]、2021年度・2022年度は[5]）されており、表1に示すように全8回で構成されている。いずれの回も90分間の授業中に行う内容と授業後に行う活動（事後学習）があり、学習管理システム（Moodle）を使った授業サイトに提出する課題が各回で設定されている。実際は、授業中に実施する活動の準備を中心とした事前学習、グループ活動を中心とした授業中の学習、提出課題に取り組むことを中心とした事後学習の3つで各回が構成されている。

事後学習では、履修者同士の相互評価も行う。原則、各回でこの相互評価を2回実施する。1回目はいわゆる仮提出に対する評価であり、本提出に向けたコメント出しを行う。これにより、事後学習においても協働で学ぶ機会を設けている。2回目は本提出に対する評価であり、各回で定められた評価観点にしたがって、履修者が点数をつける。この点数は学術リテラシーの最終成績に反映される。

表1 教科書の構成と提出課題

回	各時間の内容	提出課題
1	心をほぐしてコミュニケーション能力を高める	授業中の活動報告（2分間発表原稿作成）
2	新聞の切り抜きレポーター	新聞記事の紹介（2分間発表原稿作成）
3	伝えること	グループのひみつ話まとめ（新聞作成）
4	記憶をたどってみれば	「〇〇（例：嬉しい）」という言葉を使わないで「〇〇」と思ったことを書く（自由作文）
5	文体にこだわって	「今日の朝起きてからのこと」について「〇〇（例：相田みつを）」風を書く（自由作文）
6	新聞読み比べ	4社の社説まとめ（2分間発表原稿作成）
7	本の要約	指定図書の本評（2分間発表原稿作成）
8	新聞記事をもとにプレゼンテーションを作成	新聞記事のスクラップから共通するテーマを見つけ、そのテーマについて、記事を引用しながら意見を述べる（2分間プレゼン資料作成）

2. 2 学術リテラシーの運営

表2は学術リテラシー各年度の実施方法を示したものである。一部の例外を除いて、各年度の1年次生約2,000名を、1クラス45名程度になるように45クラス程度に分割した。この分割は、学部・学科等の単位ではなく、各履修生に履修希望曜日・時限を聞いた上で実施している[1][2]。2020年度は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響で6月上旬に授業を開始することになり、全7回を同期型オンラインで毎週実施した。2021年度以降は感染症対策をした上で、全8回を対面かつ隔週で実施した。

表3は各回の実施内容を示したものである。2021年度までは、表1で示した教科書の構成どおりに進め、「本の要約」と「新聞記事をもとにプレゼンテーションを作成」の回を、履修者同士の相互評価に加えて、担当教員による評価も必ず行う回として設定した。2022年度は各回のつながりを意識して授業の実施順序を変更し、前半4回が「読み中心」、後半4回が「書き中心」になるように編成した。これにより、担当教員が必ず評価する回を分散させている。

表2 学術リテラシー実施方法

	2020年度	2021年度・2022年度
実施時期	6月上旬～7月中旬	4月上旬～8月上旬
実施回数	全7回(毎週実施)	全8回(隔週実施)
講義形式	同期型オンライン(動画視聴)	対面(教員による講義)

表3 学術リテラシー実施内容

回	2020年度	2021年度	2022年度
1	心をほぐしてコミュニケーション能力を高める	心をほぐしてコミュニケーション能力を高める	心をほぐしてコミュニケーション能力を高める
2	新聞の切り抜きレポーター、伝えること	新聞の切り抜きレポーター	新聞の切り抜きレポーター
3	記憶をたどってみれば	伝えること	新聞読み比べ
4	文体にこだわって	記憶をたどってみれば	新聞記事をもとにプレゼンテーションを作成
5	新聞読み比べ	文体にこだわって	伝えること
6	本の要約	新聞読み比べ	文体にこだわって
7	新聞記事をもとにプレゼンテーションを作成	本の要約	記憶をたどってみれば
8		新聞記事をもとにプレゼンテーションを作成	本の要約

注) 背景が灰色の回は担当教員による評価を必ず実施する。

2. 3 アンケートの概要

表4はアンケートの実施概要を示したものである。本稿の付録に示すとおり、アンケートは多肢選択式・自由記述式合わせて全20問で構成されており、質問項目を本学入学前の状況（項目1-1～1-8）と本授業の受講中もしくは受講後（項目2-1～2-12）の2つに分けて履修者に回答を依頼した。

表4に示すとおり、各項目は1章で述べたアンケートの実施目的に対応している。目的1に対応する質問項目では、学術リテラシーで実施する主な活動の経験有無や活動に対する気持ちを問うており、小中高等学校などで行われている活動を確認している。目的2に対する項目では、授業中の課題への対応や授業運営に対する意見を問うており、2.2節で示した運営方法の検討に利用している。目的3に対する項目では、学術リテラシーで達成した内容を問うており、履修者が1章で示した達成目標をきちんと達成しているか否かを確認している。

表4 アンケートの実施概要

項目	説明
目的	1. 各履修者が本学へ入学する前の状況を確認する。 2. 学術リテラシー実施方法や提出課題の内容に関する意見を聴取する。 3. 各履修者が学術リテラシーを履修した後の成果を確認する。
対象者	各年度の学術リテラシー履修者（1年次生以外を除く）
期間	各年度の第8回授業終了後（概ね7月下旬）～9月上旬
回答方法	学習管理システム上のアンケートフォームに入力（無記名式）
回答率	2020年度：81.1%、2021年度：69.6%、2022年度：51.9%
質問項目	上記の各目的に対する項目の概要は次のとおり（詳細は付録で示す） ・ 目的1（項目1-1～1-8）： * 新聞記事のスクラップ、新聞記事作成、発表原稿作成、本の要約、レポート作成の経験有無 * 文章の読み・書き、他者とのコミュニケーションに対する気持ち ・ 目的2（項目2-1～2-6、2-10、2-12）： * 新聞の入手方法、要約する本の選定方法、オンライン学習で困ったこと、授業全体を通して苦労したこと、授業で最も意欲的に取り組んだ内容 * 授業展開速度・各課題の時間配分、課題量・難易度に対する感覚 ・ 目的3（項目2-7～2-9、2-11）： * 文章の読み・書き、他者とのコミュニケーションに対する気持ちの変化 * 授業全体を通して成長したと感じたこと

3. アンケート結果および考察

本章では、1章で示したアンケートの実施目的ごとに節を区切って、節ごとに関連するアンケートの結果およびそれを受けた考察を述べる。なお、項目 1-6 から 1-8 の結果については、関連する項目 2-7 から 2-9 の結果と合わせて示す。

3. 1 本学へ入学する前の状況

図 1 は、学術リテラシーで実施する主な活動の経験有無を問うた項目 1-1 から 1-5 に対する結果を示したものである。3年間の回答傾向について、10ポイントを超える大きな変動はなく、回答者の4割程度が新聞記事スクラップの経験があると回答した。同様に6割程度が新聞記事作成、9割程度が発表原稿作成、7割程度が本の要約経験があると回答した。いずれも、教員による指導によって経験したものか、自発的に経験したものかは追跡できていないものの、小中高等学校の「総合的な学習（探究）の時間」などで行われている活動がある程度推測できる。

表 1 で示したように、提出課題の半分は「2分間の発表原稿作成」となっている。作成する発表原稿のテーマにもよるが、本節で示した結果を考慮すれば、発表原稿作成に関する提出課題は履修者が無理なく行えると判断することができる。本のジャンルにもよるが、本の要約についても概ね問題はなさそうだ。一方、新聞記事に関する活動を経験したことがある回答者は全体の半数程度となっている。表 1 で示したように、学術リテラシーでは新聞を取り扱った授業が3回設定されており、新聞に不慣れな履修者にとっては、負荷のかかる提出課題になっている可能性がある。

なお、レポート作成については、本授業で提出を求めた発表原稿なのか、いわゆる科学実験レポート等なのか曖昧であったため、質問内容に不備がある状況であった。

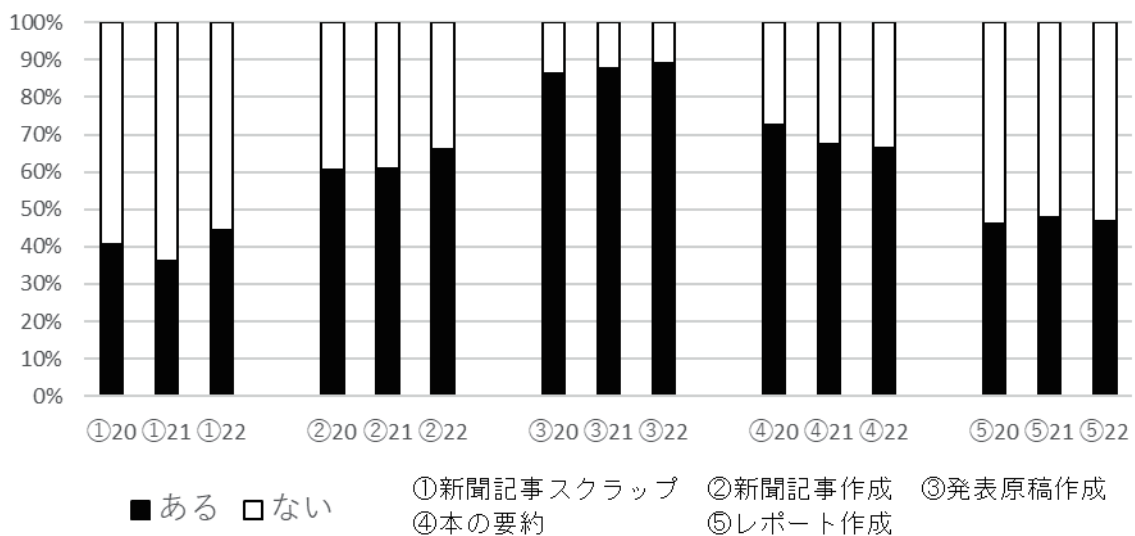


図 1 学術リテラシーで実施する主な活動の経験有無（丸数字の右側は年度を示す）

3. 2 学術リテラシー実施方法や提出課題の内容に関する意見

図2は授業期間中の新聞入手方法を問うた項目2-1に対する結果を示したものである。2020年度は、新聞に慣れてもらうことを目的として定期購読を授業中に強く勧めていた。しかし、学生割引などがあったとしても、購読費用の壁が高いからか、定期購読者は全体の1割にも満たなかった。COVID-19の影響もあり、実家での購読あるいはコンビニエンスストアでの購入など、安価で入手できる方法が採用されている。2021年度以降は、本学附属図書館サービスの1つである新聞記事データベース（学術情報DB）へアクセスできることを授業中に十分周知したため、この利用者が急増した。同時アクセス数の制限はあるものの、無料で新聞記事を閲覧できることから、今後もこのデータベースの利用者数が多い状態が続く可能性が高い。

図3は要約する本の選定方法を問うた項目2-2に対する結果を示したものである。単回答の項目であるため、最も重要な基準が回答されていると推測すると、どの年度も本のタイトルが選定基準になっていることが分かる。本の選定が必要ない状況（推薦1冊：推薦課題図書が1冊だった）を除けば、インターネットなどで公開されている書評もある程度参考になっていることが分かる。

オンライン学習において困ったことがあるかどうかを問うた項目2-3について、「ある」と回答した割合は、2020年度は53.6%、2021年度は2.5%、2022年度は3.2%であった。2020年度はCOVID-19の影響で対面授業ができなかったことや、オンライン学

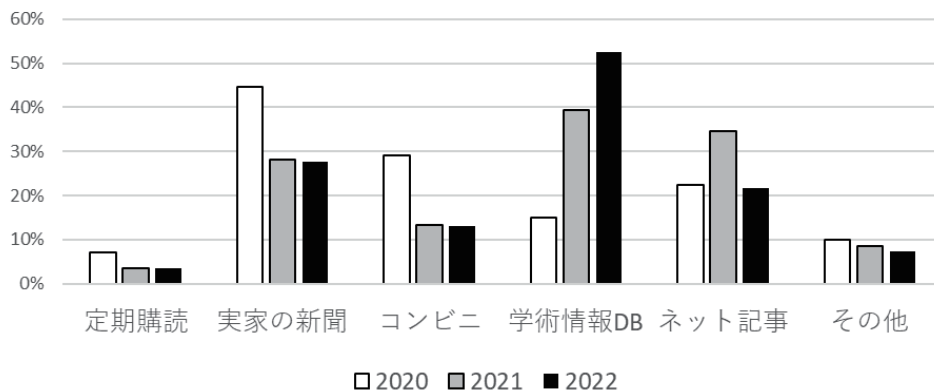


図2 授業期間中の新聞入手方法 (複数回答可)

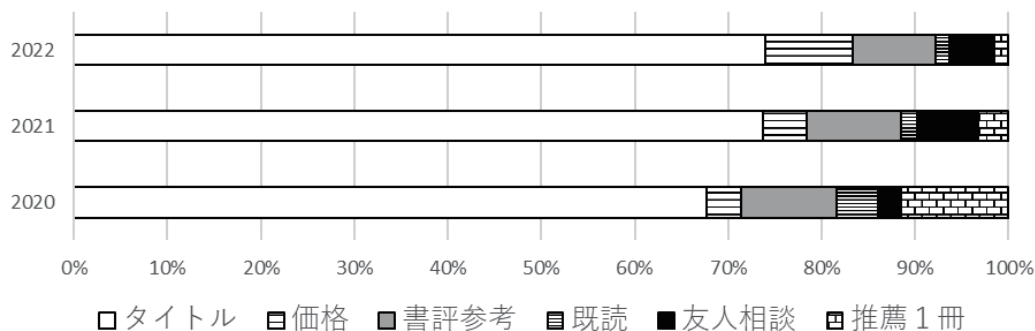


図3 要約する本の選定方法 (単回答)

習に係る整備が十分に行われていなかったこともあり、他履修者とのコミュニケーションを取ることに関する苦勞が伺えた。2021年度からは対面授業において授業サイトでの操作方法等を十分に説明したため、「ある」と回答した割合が大きく減った。

一方、オンライン学習を含めて、学術リテラシーで苦勞したことを問うた項目 2-10 について、図 4 は 2022 年度の回答傾向を共起ネットワークで表現したものである。共起ネットワークは、自由記述式回答において、同じ回答内によく出現する語（共起する語）を線で結んだものであり、強く結びついた部分ごとに自動的にグループ分けされる[6]。また、各単語を囲う丸が大きいほど、多くの履修者が回答したことを示している。図 4 を見ると中央下部にある「課題」を囲う丸が共起ネットワーク内で最も大きく、それにつながる単語として「多い」「提出」「大変」「時間」があった。このことから、「課題の量が多く提出が大変だった」という回答傾向が見られることが分かる。次に特徴的なのは、中央上部にある「文章」「苦勞」である。それらにつながっている単語を見てまとめると、文章を書くことが難しい、あるいは文章を書くことに苦勞したことが伺える。以上の回答傾向は 2021 年度でも同様であった。

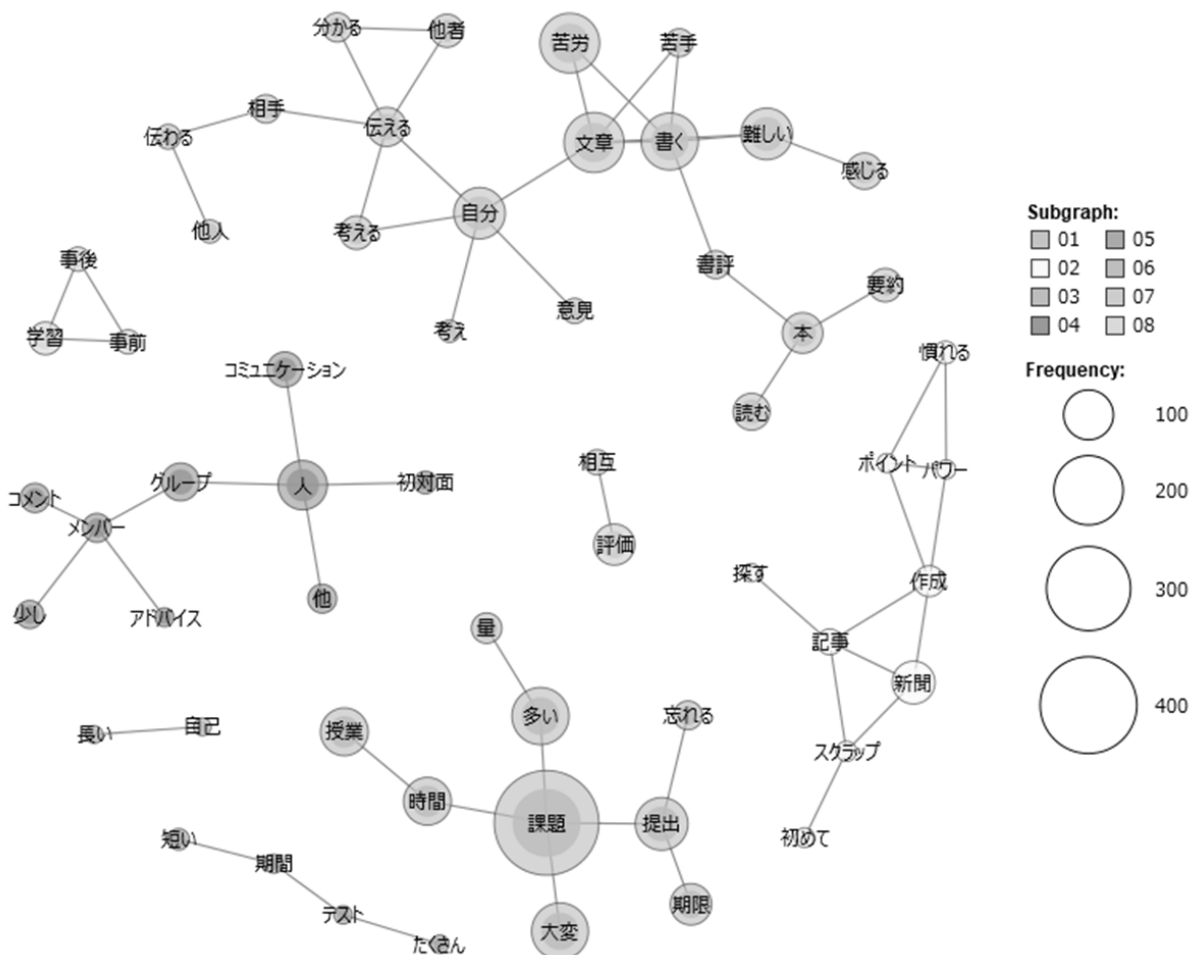


図 4 授業で苦勞したことに対する回答の共起ネットワーク。KH Coder 3 [6] で出力されたものをグレースケールで示した。出力の前処理として実行する形態素解析により、品詞の違いで異なる単語（丸）として表示される場合（「考える」と「考え」）や、通常は一単語で使われる言葉も分割される場合（「パワー」と「ポイント」）がある。

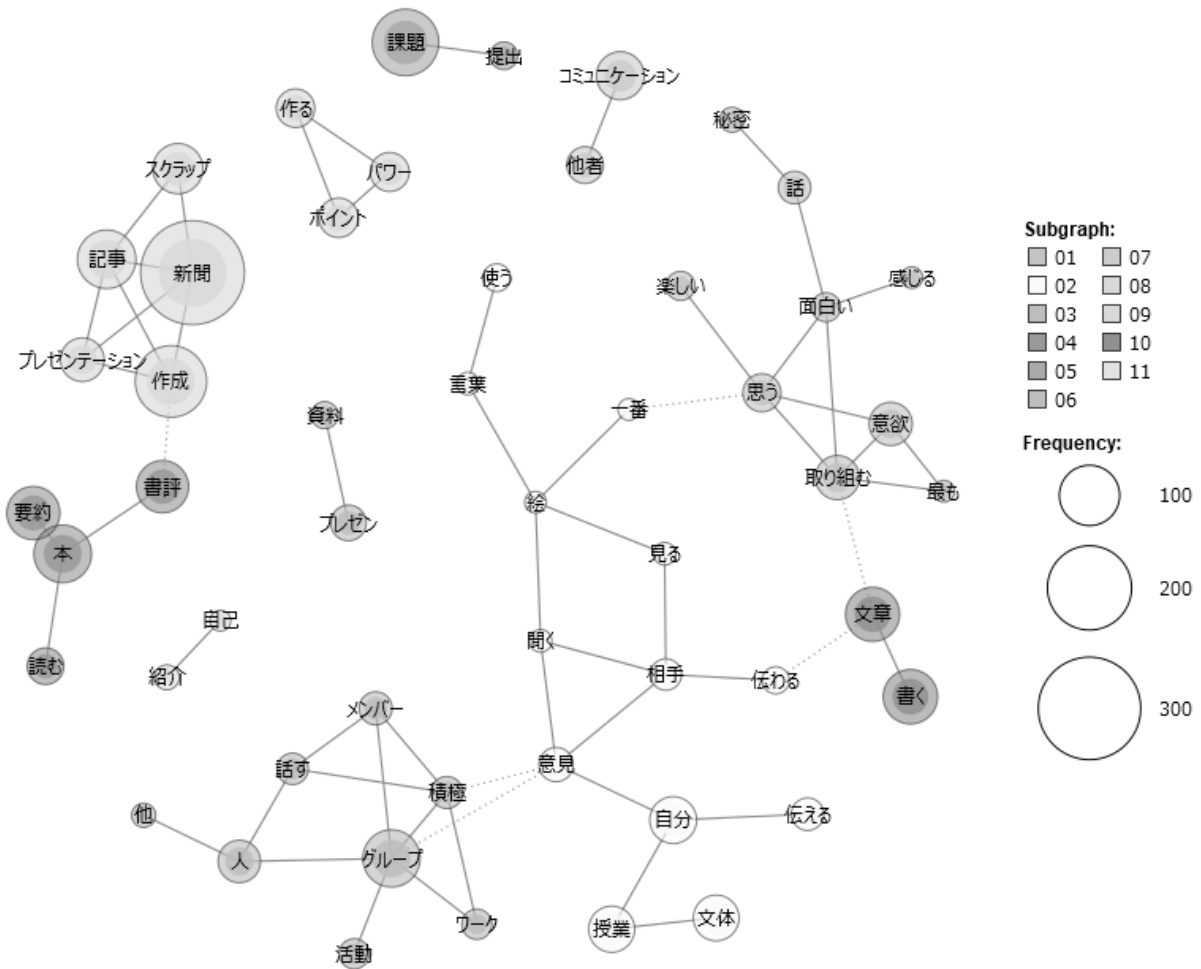


図5 もっとも意欲的に取り組んだこと

もっとも意欲的に取り組んだことを問うた項目 2-12 について、図 5 に 2022 年度回答の共起ネットワークを示した。単語を囲う丸が最も大きいのは、左上にある「新聞」であり、それに「作成」「記事」「スクラップ」「プレゼンテーション」がつながっている。このことから、新聞を扱った課題は概ね意欲的に取り組まれていたことが伺えた。図 5 を見ると他にも、本の要約、本の書評、グループメンバーと積極的に話すこと、他者とのコミュニケーション、文章を書くことなども挙げられていることが分かる。以上の回答傾向は 2021 年度でも同様であった。

本節最後の結果として、授業運営に対する履修者の感じ方を問うた 3 項目について述べる。図 6 は学術リテラシーの授業展開速度や各課題の時間配分（項目 2-4）について、図 7 は課題の量（項目 2-5）について、図 8 は課題の難易度（項目 2-6）について問うた結果を示しており、これらの回答傾向は互いに影響し合うと考えられる。表 2 で示したように、2020 年度は、2021 年度以降とほぼ同じ内容を 7 週間で毎週実施したため、授業展開速度が速いという回答が過半数の履修者から得られている。課題の量が「多い」と「やや多い」を合わせた割合、および課題の難易度が「難しい」と「やや難しい」を合わせた割合も 3 年間で最も多い。2021 年度以降は全 8 回で隔週実施となったため、授業展開速度に対する回答では「普通／適度」と回答した履修者が 7 割

を超え、課題の量や難易度に対する回答でも「適度」が増えた。10ポイントを超える大きな変動ではないが、2022年度では、表3で示したように授業の実施順序を変えたことや担当教員が必ず評価する回を分散させたこともあり、授業展開速度が速いという回答が3年間で最も少なくなっている。

提出課題の1つ1つは決して難しくないと考えられ、学術リテラシー全体の学習時間が45時間(=1単位)になるように課題を提示している。しかし、学部・学科等が異なる履修者とのコミュニケーション、授業サイト上の操作、履修者同士の相互評価などの活動が、入学直後の1年次生にとっては心理的な負担につながり、それが、課題量が多いという回答や難易度が高いという回答につながっている可能性がある。

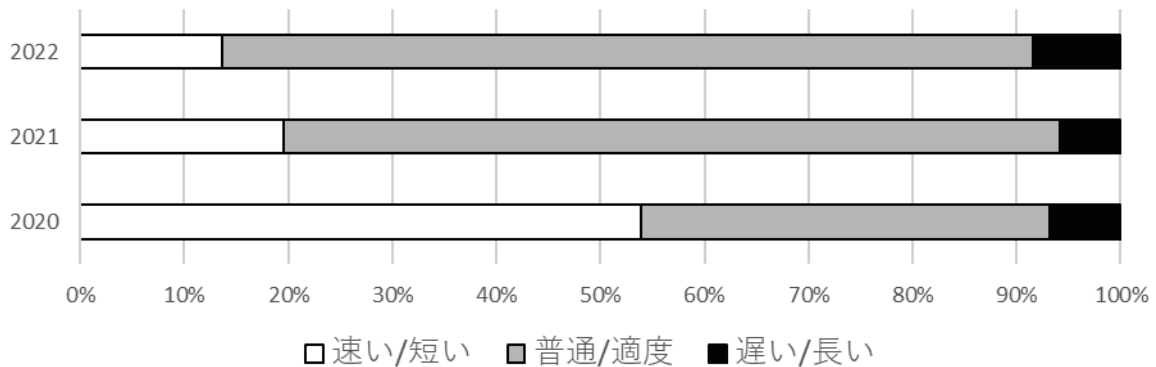


図6 学術リテラシーの授業展開速度・各課題の時間配分について

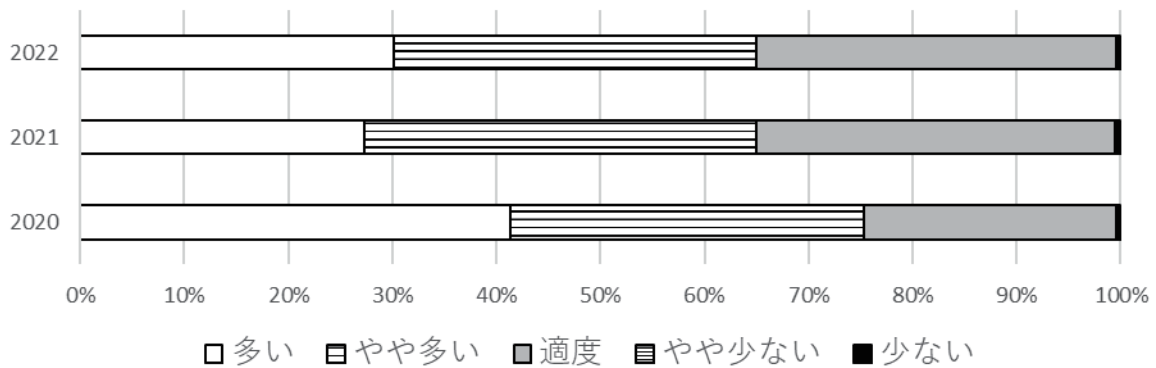


図7 学術リテラシーにおける課題の量

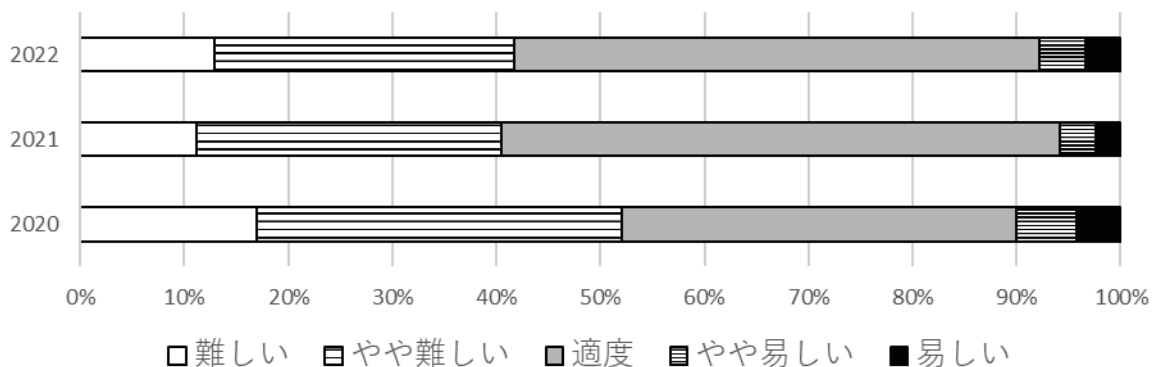


図8 学術リテラシーの課題の難易度

3. 3 学術リテラシー履修後の成果

図9は文章を読むことに対する気持ちについて、入学前の状況を聞いた項目1-6の回答それぞれに対し、受講後の状況を聞いた項目2-7の回答割合を示したものである。図9は2022年度の結果を示しており、これを見ると、もともと読むことが好きである履修者ほど「好きになった」と回答する割合が多いことが分かる。「どちらかと言えば好きになった」まで含めると、中央の3選択肢（どちらかと言えば嫌い、どちらでもない、どちらかと言えば好き）で4割程度の回答となった。以上の回答傾向は2020年度や2021年度も同様であった。

図10は文章を書くことに対する気持ち（項目1-7、2-8）について、図9と同じように示したものである。こちらにおいても、もともと書くことが好きである履修者ほど「好きになった」と回答する割合が多かった。この傾向は2020年度や2021年度も同様である。「どちらかと言えば好きになった」まで含めると、「嫌い」を除く4選択肢で4割程度の回答となった。この回答傾向は2021年度も同様であったが、2020年度は3割程度となった。

図9および図10の結果をまとめると、文章を読むことや書くことがもともと好きであった履修者ほど、学術リテラシーを受講してさらに好きになるという傾向があることが明らかになった。

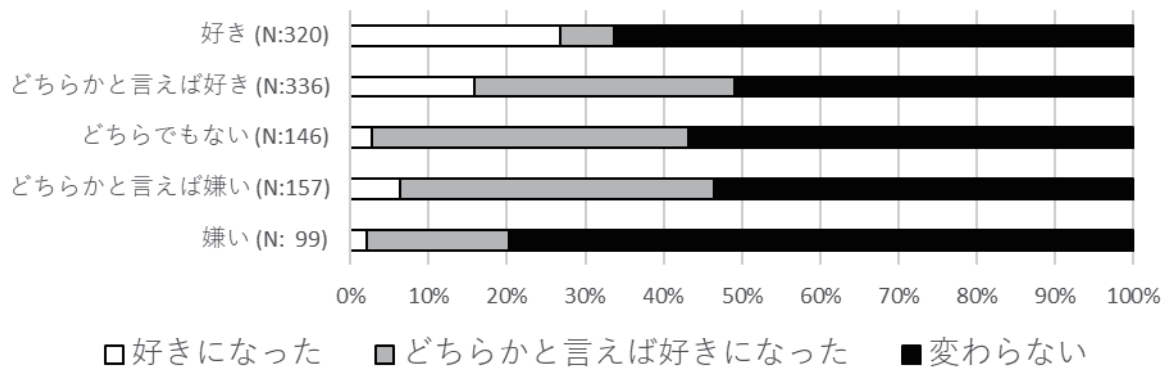


図9 文章を読むことに対する気持ち（入学前：5段階 vs 受講後：3段階）

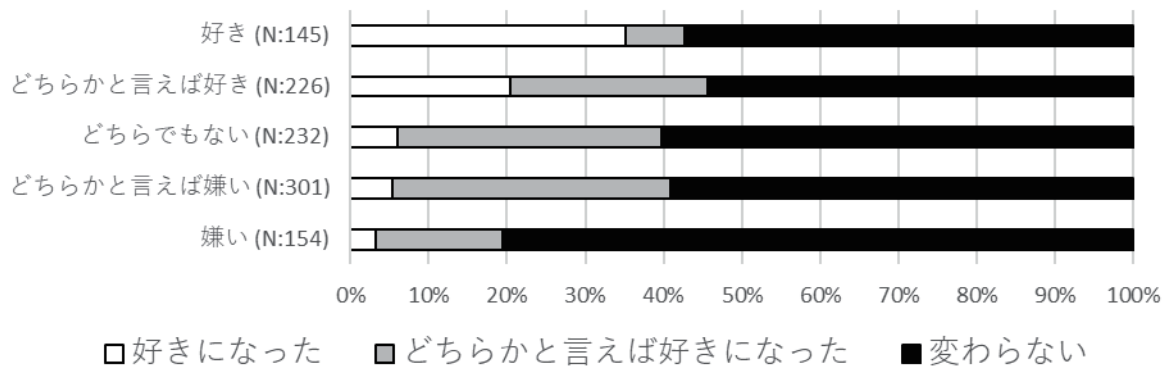


図10 文章を書くことに対する気持ち（入学前：5段階 vs 受講後：3段階）

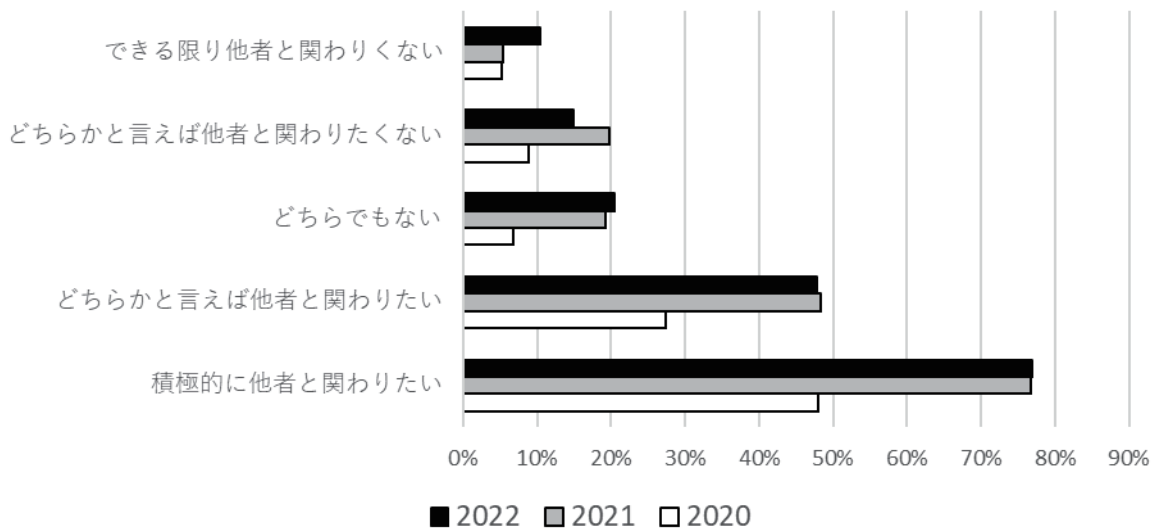


図 11 他者とのコミュニケーションに対する気持ち (入学前:5段階) vs 受講後に「自分から積極的に他者と関わりたい」と回答した割合

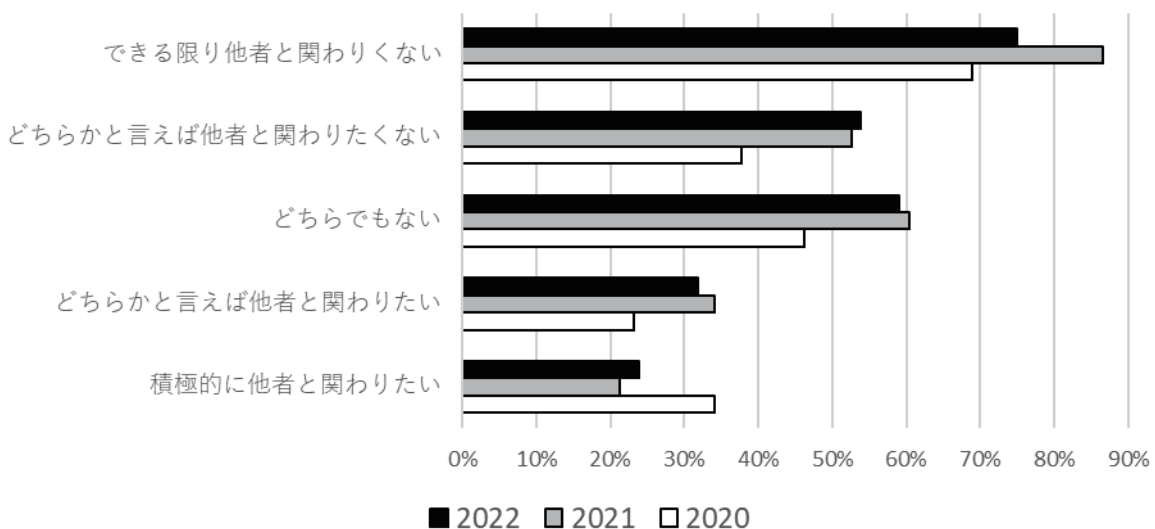


図 12 他者とのコミュニケーションに対する気持ち (入学前:5段階) vs 受講後に「変わらない」と回答した割合

図 11 は他者とのコミュニケーションに対する気持ちについて、入学前の状況を聞いた項目 1-8 の回答それぞれに対し、受講後の状況を聞いた項目 2-9 で「自分から積極的に他者と関わりたい」と回答した割合を示したものである。また、図 12 は項目 2-9 で「変わらない」と回答した割合を示したものである。

これらの結果においても、文章の読み書きに対する結果と同様となり、もともと他者と関わりたい履修者ほど受講後に「自分から積極的に他者と関わりたい」と回答しており、もともと他者と関わりたくない履修者ほど「変わらない」と回答する傾向があることがあった。

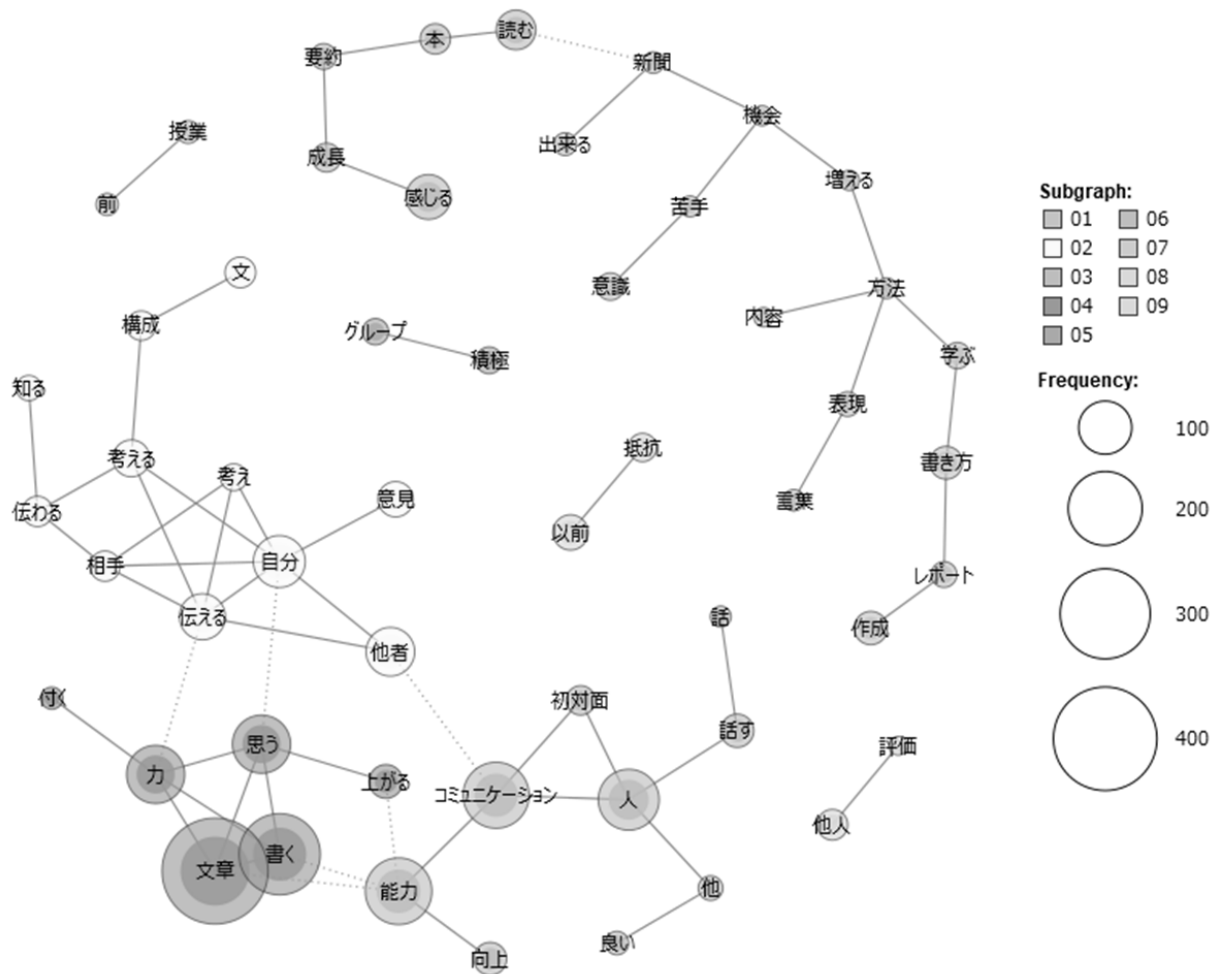


図 13 学術リテラシーを通して成長したと感じたこと

最後に、学術リテラシーを通して成長したと感じたこと（項目 2-11）について、図 13 に 2022 年度回答に対する共起ネットワークを示す。全体を見ると、左下にある「文章」「書く」「力」「思う」を囲う丸が比較的大きく、中央下部の「コミュニケーション」「人」「能力」も比較的大きい。以上をまとめると、成長したと感じたことについて、

- ・ 文章を書く力
 - ・ 人とのコミュニケーション能力
- を回答する傾向が強いことが分かる。

1 章で示したように、学術リテラシーの達成目標には「大学での学びを充実させるための読解力や記述力を身につける」「他者とのコミュニケーションがとれるようになる」「適切に情報を収集し、整理分析・表現する情報活用能力を身につける」ことが含まれており、図 13 の結果を見ると、これらはある程度達成できていると考えられる。以上の回答傾向は 2021 年度も同様であった。

2020 年度については、すべての授業でオンライン実施かつ、同期型授業でも他履修者と顔を合わせることを必須にはしていなかったため、人とのコミュニケーション能力を上げる履修者は少なかった。しかし、文章を書くことについては、2021 年度以降と同様に、多くの履修者が成長したと感じたこととして挙げていた。

4. まとめと今後の展望

3章で述べた結果をまとめると次の7点になる。

- ・ 発表原稿作成や本の要約については多くの履修者が大学入学前に経験しているものの、新聞記事スクラップや新聞記事作成の経験は履修者の半数程度である。
- ・ 新聞を定期購読する履修者は少なく、同時アクセス数の制限があっても無料で閲覧できる新聞記事データベースが活用されている。
- ・ 学術リテラシーで苦勞していることは、主に課題量の多さと文章作成である。
- ・ 学術リテラシーで意欲的に取り組まれている活動は、新聞に関わる活動（新聞記事作成、新聞スクラップやそれを用いたプレゼンテーション作成）である。
- ・ 学術リテラシーの授業展開速度は2022年度時点で適度であると言える。
- ・ もともと文章の読み書きが好きな履修者ほど受講後により好きになる傾向があり、積極的に他者と関わりたいと思っている履修者ほど、受講後により積極的になる。
- ・ 学術リテラシーを通して成長したと感じたことは、主に文章を書く力と人とのコミュニケーション能力である。

課題量の多さに関する指摘が多く寄せられているものの、成長したと感じたことに対する回答を見れば、学術リテラシーはその役割を果たせていると考えることができる。新聞記事を利用した活動の経験者が少なかったとしても、それらが学術リテラシーで意欲的に取り組まれているとすれば、その点でも役割を果たせていると考えられる。一方で、日本新聞協会[7]によると1世帯当たりの新聞発行部数が年々減少していることから、この状況下で新聞に関する提出課題を今後も課すのであれば、その必要性などについて履修者に十分伝えなければならないだろう。

授業展開速度は現時点で適度であると言えるが、3.2節で述べたように、学部・学科等が異なる履修者とのコミュニケーションや履修者同士の相互評価などが、心理的な負担になっている可能性がある。そのため、たとえば学術リテラシーが始まる前や初回授業において、それらの必要性や方法などについて説明しておくことも必要かもしれない。

また、本アンケートで得られた結果ではないものの、本学で開講されているすべての科目で原則実施している「学生による授業アンケート」では、授業に対する意見や要望等を自由に記述できる欄があり、「正直、隔週90分使って学ぶほどの内容なのかが疑問です」のように、本授業の意図をくみ取ることができず、否定的なコメントを寄せた受講者もいた。そのため、このような意見に対応するためにも、初回授業において、本授業の意義をきちんと受講者に伝えていくことが必要となる。

以上の課題に対応した上で、本授業は2023年度以降も実施予定である。それに合わせて本アンケートも実施予定であるものの、表4で示したように回答率が徐々に下がってきていることから改善が必要となる。これについては、質問項目を削減し、よりの絞った形にして、短時間で回答できるようにするなど、すべての履修者が確実に回答してくれるような施策を考えていきたい。

謝辞

学術リテラシーを担当いただいた教員の皆様、本アンケートに回答いただいた履修者の皆様、学術リテラシーハンドブック（教科書）の発行や運営にご協力いただいた教職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

参考文献

1. 信州大学全学教育機構: 2021 年度共通教育履修案内抜粋, https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/general/98a0c01a74b81dfeed9ce561f7bf7119_1.pdf. [参照: 2022 年 12 月 1 日]
2. 信州大学全学教育機構: 2022 年度共通教育履修案内抜粋, <https://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/general/22754e4cd312d902d033ae9d2abf8890.pdf>. [参照: 2022 年 12 月 1 日]
3. 「学術リテラシー」シラバス, <https://campus-3.shinshu-u.ac.jp/syllabusj/Display?NENDO=2022&BUKYOKU=G&CODE=G0A10019>. [参照: 2022 年 12 月 1 日]
4. 小山茂喜(編著): 学術リテラシーハンドブック, 学事出版, 2020.
5. 小山茂喜(編著): 新訂版 学術リテラシーハンドブック, 学事出版, 2021.
6. KH Coder 3, <https://kncoder.net>. [参照: 2022 年 12 月 1 日]
7. 一般社団法人日本新聞協会: 新聞の発行部数と世帯数の推移, <https://www.pressnet.or.jp/data/circulation/circulation01.php>. [参照: 2022 年 12 月 1 日]

(平井 佑樹 信州大学 総合人間科学系 全学教育機構 准教授)
(小山 茂喜 信州大学 総合人間科学系 教職支援センター 教授)
(長谷部 めぐみ 信州大学 総合人間科学系 全学教育機構 助教)
(前田 宏太郎 信州大学 総合人間科学系 全学教育機構 助教)
2023 年 2 月 9 日受理 2023 年 2 月 28 日採録決定

付録. アンケート質問項目

表 A アンケート質問項目 (1/3)

- | |
|---|
| <p>1. 大学入学前の状況をうかがいます。各設問の回答としてあてはまるものを1つ選択してください。(全問必答)</p> <p>1-1. 大学入学前までに、新聞記事をスクラップしたことがありますか？
【単回答】ある／ない</p> <p>1-2. 大学入学前までに、新聞記事形式の成果物を作成したことがありますか？
【単回答】ある／ない</p> <p>1-3. 大学入学前までに、発表するための原稿を作成したことがありますか？
【単回答】ある／ない</p> |
|---|

表 B アンケート質問項目 (2/3)

- 1-4. 大学入学前までに、本の要約をしたことがありますか？
【単回答】 ある／ない
- 1-5. 大学入学前までに、課題としてレポートを作成したことがありますか？
【単回答】 ある／ない
- 1-6. 本授業の受講前は、本などの文章を読むことについてどのように思っていましたか？
【単回答】 読むことが好きだ／どちらかと言えば、読むことが好きだ
／どちらでもない／どちらかと言えば、読むことは嫌いだ
／読むことは嫌いだ
- 1-7. 本授業の受講前は、文章を書くことについてどのように思っていましたか？
【単回答】 文章を書くことが好きだ／どちらかと言えば、文章を書くことが好きだ
／どちらでもない／どちらかと言えば、文章を書くことは嫌いだ
／文章を書くことは嫌いだ
- 1-8. 本授業の受講前は、学習中の他者とのコミュニケーションについてどのように思っていましたか？
【単回答】 自分から積極的に、他者と関わりたい
／どちらかと言えば、他者と関わりたい／どちらでもない
／どちらかと言えば、他者とは関わりたくない
／できる限り、他者とは関わりたくない
2. 本授業の受講中もしくは受講後の状況をうかがいます。各設問の回答として当てはまるものを選択、または回答を記述してください。(全問必答)
- 2-1. 本授業期間中、「新聞」をどのように入手して読みましたか？
【複数回答可】 自分で定期購読をした／実家の新聞を読んだ
／コンビニエンスストアなどで買って読んだ
／大学図書館の学術情報データベースを利用して読んだ
／新聞ではなく、インターネット上のニュース記事を読んでいた
／その他
- 2-2. 本授業の「本の要約」では、推薦課題図書からどのように本を選びましたか？
【単回答】 タイトルで選んだ／価格で選んだ／書評などを見て選んだ
／以前に読んだことがあった／友だちと相談して選んだ
／推薦課題図書が1冊だった

表C アンケート質問項目 (3/3)

- 2-3. 本授業のオンライン学習において、何か困ったことはありましたか？
【単回答】 ある／ない ※「ある」の場合は困ったことを自由記述
- 2-4. 本授業の授業展開速度・各課題の時間配分についてどのように感じましたか？
【単回答】 速い・短いと感じた／ふつう・適度だった／遅い・長いと感じた
- 2-5. 本授業の課題の量についてどのように感じましたか？
【単回答】 多いと感じた／やや多いと感じた／適度だった／やや少ないと感じた
／少ないと感じた
- 2-6. 本授業の課題の難易度についてどのように感じましたか？
【単回答】 難しいと感じた／やや難しいと感じた／適度だった
／やや易しいと感じた／易しいと感じた
- 2-7. 本授業の受講後、本などの文章を読むことについてどのように変わりましたか？
【単回答】 読むことが好きになった／どちらかと言えば、読むことが好きになった
／変わらない
- 2-8. 本授業の受講後、文章を書くことについてどのように変わりましたか？
【単回答】 文章を書くことが好きになった
／どちらかと言えば、文章を書くことが好きになった
／変わらない
- 2-9. 本授業の受講後、他者とのコミュニケーションについてどのように考えるようになり
ましたか？
【複数回答可】 自分から積極的に、他者と関わりたい
／テキストのみのコミュニケーションは、難しいと感じている
／変わらない
- 2-10. 本授業全体を通して、苦労したことを記入してください。
【自由記述】
- 2-11. 本授業を通して、成長したと感じたことを記入してください。
【自由記述】
- 2-12. 本授業で、もっとも意欲的に取り組んだ内容を記入してください。
【自由記述】